

あこがれはまだ遠く

西荻 麦

曇天。足元はスニーカーか革靴。帽子は園芸用のチューリップハット。

なめてるのか、おまえら。と、注意したくなるが、わたしもジョーンズを履いている時点で登山をなめくさっている。

まったく登山に縁のないわたしたち家族が、なぜ立山へ登ろうとしたのか。理由は単純明快で、富山出身者の知人友人にひたすら勧められたからだった。

京都の大学へ進学してから、なぜか富山出身者と知りあう機会が非常に多かった。ゼミで、サークルで、勤め先で、必ず富山出身者と出会った。

皮肉なもので、実はわたしの第一志望校は富山大学だった。圧倒的な勉強不足で門前払いされる結果となったが、受験日に富山へ行ったことはい思い出である。

湿り気を含んだ冬の寒さは気持ちよく、市内を走る路面電車は心地よく、試験後に親に連れていってもらったお店でのブリしゃぶは目をむくほど美味しかった（受験に行ったとは思えない旅行気分、そして贅沢）。

あまりに美味しかったので、その数年後にあった両親の銀婚式祝いには富山旅行をプレゼントしたほどだ。受験シーズンとは異なる春先だったため、お品書きは違っていたようだが、ホテルイカを堪能したと喜んでくれた。

そんなわけで富山に直接的なご縁はなかったが、富山への思いは色あせることはなかった。むしろこれだけ富山出身者と知りあえるなんて、富山がわたし

を呼んでいるのでは？

勝手に思いこむのは得意である。その思いこみが実を結んだのか、親しくなった富山出身者の実家帰省にこのこついでいくことに成功。図々しくいろいろな場所へ案内してもらった。

落差日本一の称名滝。今や写真映えすると評判の埋没林博物館。ソウルフードを堪能できるたら汁街道。有名建築士が手がけた富山市ガラス美術館。五箇山観光からのくろば温泉。ちょっと足を伸ばせば県を越えて、信州戸隠、能登半島。

とにかくどれもこれも楽しい思い出なのだが、地元の人に言わせれば「富山と言えば立山！」らしい。

立山を登ってなんぼ。立山に登らねば富山に来たとは言えぬ。なんだかそのくらいの権威を感じた。ははあ、なるほどなるほど、とか頷きながら、登山とは無縁だったわたしはその言葉を実行に移すことはしなかった。遊びまわるくせに、新たなチャレンジに対しては腰が重い。厄介なおばさんである。

が、ついに時は来た。わたしと同じように登山に無縁の家族が、わたしよりも行きたいと意欲を見せたのである。気づけば雷鳥沢ヒュッテに予約を入れて、サンダーバードの時刻を調べていざ行かん。一人だとやらないことも、誰かと一緒だと一気に転がりだすものだ。

で、冒頭の状況に戻る。立山に焦がれたくせに、立山に臨むべき姿勢を家族の誰一人理解していなかった。

なめくさった装備でひいひい言いながら登ったのが立山の怒りを買ったのだ

ろうか。分厚い雲から雨がばらついて、美しいと評される弥陀ヶ原湿原も室堂もどんよりした表情を見せる。我々家族もどんより。雨脚が激しくなり、さつさとヒュッテに避難。関係ないけど、このときわたしのデジカメの調子さえ悪く、景色を収めた写真がなぜか紫色をしていた。

ヒュッテは暖かく快適だった。通常、味噌汁であるらしい汁物がこの日はクリームシチュー。ここで働いたことのある富山出身者によれば、これは大変なラッキーらしい。たとえ、ほかのおかずとの相性を考えるなら味噌汁のほうが……というツツコみが頭をよぎったとしても幸運なのである。大変美味しくいただいた。

夜、外に出るとあたりは闇に包まれていた。きっと天気さえ良ければ星空がすばらしかつただろうということは素人でもわかる。寒いのでさつさと中に引っこみ、歯磨きをしようとしたら山の水は大層冷たかった。冷たすぎて、わたしの虫歯が痛みを発しだした。これもまた関係のない話である。

翌朝になっても天候は回復せず、家族の体力も回復せず登山続行を断念。なめくさった軽装の家族はすごすごと下山し、なぜかまんだら遊苑へ。来訪者の五感に訴えかけるといふ、若干の怪しさを秘めた大変アーティスティックで信仰的なスポット。立山の風景とのギャップはすごいが、とても楽しめた。なによりすごいのはこの施設が公営だということ。あっぱれ富山。先進的すぎるぜ富山。

富山の器の大きさは再確認できたが、富山出身者が全力で推す立山登山は失敗に終わった。またリベンジしたいね、とゆるい装備でゆるく誓いあった我々

家族だったが、残念ながらそれは叶わなくなった。

母がこの世から一抜けしたからだ。闘病中も立山登山の話は何度か持ちあがったが、現実的な問題と、現実から目を背けていたせいで決行はできなかった。手元に残るのは、紫色に染まった室堂と家族が写る写真のみ。笑えるが笑えない。笑えないが笑うしかない。

立山は雄大にそびえ、揺らぐことはない。いつでも、どんなときでも富山の景色を縁取っている。変わるのは人間のほうで、いつでも、どんなときでもなると不変さはわたしたちには備わっていない。立山と遊んでもらうためには、実は悠長なことなど言っていられない。時間は有限だ。当たり前のことを、紫色の写真をながめるたび思う。

立山はわたしにちよっぴり登山への興味を向けてくれた。何年もかけて、スニーカーは登山靴に。ただのTシャツやジーンズは速乾性や伸縮性のあるものになり、タウンユースのリュックは登山用リュックになった。

もちろんまだまだ低山ばかり、それどころか丘レベルの山しか登ってはいないが、徐々に徐々に山女の装いになってきていると思う。土を踏みしめることや、鳥の声を聞くこと、花やきのこを見つけることなど、少しずつ楽しみ方がわかってきたような気がするのだ。

富山出身者は粘り強く、立山登山を毎年勧めてくれる。それは立山が富山の絶対的な象徴であり誇りであることを意味している。いなくなった人間の分まで登ろうなんて殊勝なことは考えていない。ただ、わたしが登りたい。最近はその思うようになった。そして、今度こそ晴天の下、紫色じゃない、ありのま

まの色を写真に収めたいものである。

とは言え、これから厳しい冬がやってくる。立山登山へのリベンジは来夏まで、ひとまずお預けである。

それまでは、富山駅の寿司屋でえび出汁の味噌汁を飲みたいし、宇奈月温泉でのんびりしたいし、高岡大仏を拝みたいし、ミラージュランドの立体迷路にチャレンジしたいし、小矢部のアウトレットで買い物だっけしたい。行きたいところ、やりたいことは山ほどある。立山ほどある。

あれ、移住するべきなのだろうか。本気で考える今日この頃。

わたしにとってやっぱり富山は、高校三年生からずっとあこがれの地なのである。